

[特集2]
信頼とその根拠

学校教育の果たす役割
—信頼の根拠を構築する—

熊本大学
藤中隆久

I はじめに

現代は、さまざまな価値が相対化された時代である。人間性心理学がいま心理学界で一定の支持を得ている現状も、価値が相対化された時代ゆえの現象といってよい。“ヒューマニズム”は“人間性”と訳されることが多いので、ヒューマニスティック・サイコロジーは「人間性心理学」と訳されている。しかし、この言葉にはもともと“人文主義”というような訳語があげられていて、神の権威に基づく絶対的な価値に対する疑義というような意味あいがある。絶対的権威への疑いは、ルネサンス、東ローマ帝国滅亡、宗教改革と時代が下るとともに加速していった。そして、実存主義の登場を経て、絶対的価値の地位は決定的に低下した。そのような流れの中からヒューマニスティック・サイコロジーも出現したのである。

このような時代は、何人も自らのよって立つ価値を否定されることもなく、権威から不当な弾圧を受けることもなく、個人が尊重される良い時代であるともいえる。しかし、また、価値が相対化され、人は何を信じればいいのかかわからないという困った時代であるともいえる。

このような時代にあっては、日本国憲法は改正されるべきなのか、原子力発電所は本当に必要なのか、TPPには加入するべきなのか、消

費税率は今後さらに上げるべきなのか、といった問題に正解を出せる人はいないだろう。さまざまな価値は、どれも否定はされ得ないので、その解のみを正解とする根拠を示すことが、困難だからである。

また、一生懸命勉強してよい大学に行き、よい就職を勝ち取ることが本当に幸せなことなのか、不登校の子どもが学校に行くようになることが本当によいことなのか、ニート、フリーター、引きこもりという生き方は否定されるべきなのかといった問題にも、正解を出せる人はいないだろう。さまざまな価値が、どれも否定はされ得ないので、その解のみを正解とする根拠を示すことが、困難だからである。

特に人間性心理学者はこの種の問題に対して、“正解”を出したがる。価値の相対化、個人の尊重の流れの中で出現したのがヒューマニスティック・サイコロジーだからである。

だからこそ、人間性心理学会で、「信頼の根拠」を論じておくべきなのである。ここを論じておくことは、この心理学の存在の根拠を論じることであり、ここを論じておかなくは人間性心理学が成り立たないテーマであるとさえいえよう。価値を相対化させ、時代に困難を課した責任の一端は我々人間性心理学者にもあると筆者は考えている。相対化により個人を尊重する社会を出現させたことの賛辞を、人間性心理学も

受け取ってもよいであろう。しかし、負の結果として「信頼の根拠」が失われてきたという問題もしっかりと見据え、何を信頼の根拠とするかについての提言をする責任も、人間性心理学者にはあるのではないだろうか。本稿では、不干斎ハビアンという人物の学びと古武道の形稽古の概念を援用して、信頼の根拠に関する一つの提言をすることを目的とする。

II 不干斎ハビアン

1 不干斎ハビアンの評価をめぐる

まず、不干斎ハビアンという、戦国時代から江戸時代初期に活躍した人物について考えてみたい。不干斎ハビアンは、もともとは禅宗の僧侶であり、キリスト教に対して、はじめは排斥するという反応を示している。ところがその後、キリシタンに転向して、今度は禅などの仏教をはじめ、その他の既存の日本の宗教を激しく攻撃する側の強力な一員となるのである。しかし、さらにその後、キリスト教も捨て無宗教を標榜し、最後はキリシタンを排斥する側に回るのである。そのような行為は「転向」と表現されるが、転向は、信仰を深めることができなかつたがゆえと考えられることが多い。二度も転向したハビアンも、つまり信仰を深めることができなかつたということなのだろうか。

釈(2009)は、カトリック教徒によるハビアン評価として、遠藤周作や三浦朱門の「ハビアンの信仰の浅薄」説を挙げている。また、山本七平も、信仰という見地から、同様の主張をしている。山本(1989)は、ハビアンを「信仰の人」というよりも「比較宗教学者」のようであると指摘している。ハビアンは、「宗教も所詮は、乱世の世を鎮めて秩序を立てるための機能を果たすもの」という宗教観を持つ人であり、神、仏、儒はその目的の前に無力であったことはすでに証明済みであるから、それならば、キリスト教を採用するべきであると、主張しているのである。これは信仰とは相いれない功利

主義的な態度であろう。

海老沢(1970)も、「宗教信仰の主体把握」がハビアンには不徹底であることを問題としている。信仰は、自らの主体性を維持しながら行うことはできないはずなのに、主体性を維持しながらキリスト教信者となるハビアンの矛盾を指摘しているのである。そして、山本(1989)は、ハビアンを、「少々要領のよすぎる秀才」と評するのである。

ところが釈(2009)の不干斎ハビアン評価は、これらとはかなり異なる。釈は、ハビアンは、「誠実にその宗教の聖典を研究・査読したうえでその宗教の全体をしっかりと見極め、分析し突き詰めて論じ、なおかつ自らの宗教体験が上書きされていくという真摯さがある」宗教者と評価するのである。なぜ、遠藤周作、三浦朱門、海老沢有道(1964)、山本七平(1989)と釈徹宗(2009)のハビアン評価が、こうも違っているのだろうか。

ハビアンを「誠実」な宗教者とみるのか、「要領のよすぎる秀才」とみるのかという点で両者の評価は大きく異なっているが、しかし、それは学ぶ際の態度に対する評価の問題のように筆者には感じられる。そこには、学びの態度がよろしければ、当然、それにふさわしい結果となるはずであるとの考えが背景にあるように思われる。「信仰の浅薄」説の背景には、学んで得た内容と学ぶときの態度は関連しているとする考えが存在しているのではないだろうか。そして、ハビアンはよい結果を得られていない(つまり、転向している)ので、学びの態度もよろしくないという評価になるのではないだろうか。しかし、ハビアンの学びの結果を、転向というその一点のみで、よいものではなかつたと評価することは、本当に妥当なのだろうか。

筆者には、転向という結果により下された「信仰の浅薄」「要領のよすぎる秀才」というハビアン評価は、一神教的立場からなされた、やや一方的なもののように感じられる。キリスト教徒として学んでゆくという行為では、信仰がま

ずはじめにあるのだろう。信仰は理性では理解できるものではないからである。信仰を持って学ぶことにより、絶対神的基準による中軸を自己の内部に築き上げてゆき、その中軸に照らし合わせて、正・邪や善・悪の基準をより確かなものにする。このことが宗教的に成熟した人格であるとみなされ、このような人格になることこそが、キリスト教徒にとってのよい結果と評価される。そのためには、信仰者という立場で修行時代を過ごす必要があり、そうすれば信仰が深まり中軸が形成されるはずである。転向を繰り返すハビアンには中軸が感じられない。中軸なきハビアンは、信仰者としての立場で修業時代を過ごすことなく、要領よく知識を詰め込んだに過ぎないという評価になるのではないだろうか。

ここでハビアンを評価する視点が二つあると考えてみたい。以下のようになる。

- ① いかなる態度で学んだか。
- ② 得られた知識は自己の内部で、中軸を持つ構造となっているか。

キリスト教徒にとっては、この2点は連動していると考えられているようである。つまり、①学びの態度が正しければ、②得られた知識は自己の内部で信仰という中軸に帰着する。したがって、中軸のない構造の知識を持つハビアンは、要領のよすぎる秀才のような態度で知識を得たに過ぎないという評価となる。

2 イエスと悪魔の対話

①と②が連動していると考えられるイエス＝キリストの実例がある。有名な、イエスと悪魔の問答である。これは、新約聖書のマタイによる福音書とルカによる福音書に記されている。荒れ野で40日間の断食を終えたイエスは、悪魔から3つ質問をされる。以下に、ルカ伝から悪魔の3つの質問を引用する。

I. 「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」

II. 「この国国の一切の権力と繁栄を与えよう。(略)もしわたしを拜むなら、みんなあなたのものになる」

III. 「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。(略)こう書いてあるからだ。『天使たちに命じてあなたをしっかりと守らせる。』」

悪魔の3つの質問に対するイエスの答えは以下のとおりである。これも、ルカ伝から引用する。

I. 「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」

II. 「『あなたの神である主を拜みただ主に仕えよ』と書いてある」

III. 「『あなたの神である主を試してはならない』とされている」

悪魔の質問は、つまり悪魔の誘惑である。悪魔はイエスに、世俗の王としてこの世に君臨しろと誘惑したのである。I、IIの質問で悪魔は、石をパンに変え人々を物質的に満たすことができれば、世俗の一切の権力と繁栄を手にすることができるとそそのかしている。しかし、物質で人を満たすことも、世俗の権力を握ることもイエスは拒否する。自らの使命は、物質によって人を満たす(つまり、石をパンに変えるようなこと)ことでも、世俗の王となること(この国々の一切の権力と繁栄を与えられること)でもないイエスは感じていたからである。さらに、IIIで、悪魔から神の子であるかどうか試すことを誘惑され、その誘惑もイエスは拒否する。そして、拒否することによって確信できたのである。神を試すことを拒否することができたということは、自らが神の子であることを信じ切ることができたということであり、信じ切ることができたということは、すなわち自分は神の子であり、キリストである、とそのように確信できたのである。つまり、悪魔と問答をすることで、イエスは、自らの使命は、パンによってではなく神の教えによって人々を満たすことであり、この世の王になることではなくこの世に神の王国を作ることである、と確信できたのであ

る。問答する以前にはかすかにあったかもしれない世俗の王への誘惑も、問答により断ち切ることができた。この直後、ついにイエスは伝道の旅に出るのである。

ここで、学びの態度として大切なことは、対話である。悪魔をイエスの内なる悪魔と解釈することも可能である。とすれば、この対話は自問自答ということになる。悪魔を他者と考えても、他者の質問は、自分に向かってくるのだから、結局自問自答の形になる。つまり、他者との対話にしろ、内なる自己との対話にしろ、**学びとは自らに問いかけることを通じて深まるものである。そのような態度で学んだときに、中軸ができるのであろう。**イエスは悪魔と対話をし、自らに問いかけ続けることで、自らの道に確信を持つことができたのである。①学ぶ態度と②中軸を作ることが、イエス＝キリストにおいては連動している。連動しているがゆえに、**転向という悪しき結果を出したハビアンには、自らに問いかける信仰者としての学びの態度がない、との評価となるのではないだろうか。**

しかし、ハビアンは、転向という結果はともあれ、本当に自らに問いかける学びができなかったののだろうか。転向という結果が否定されるべきものであるがゆえに、学びのプロセスまで否定されているのではないだろうか。

釈(2009)は、中軸を作ることがなかったハビアンを、それゆえに評価している。仏教では、この世界を主宰する神仏は存在しない。さまざまな仏が、中軸とは無関係に、ある意味好き勝手にこの世に存在している。曼荼羅には、そのような仏たちの中軸なきマトリックスが示されている。中軸なき世界観を持つ仏教徒である釈には、ハビアンの中軸のなさは、むしろ好ましいものという評価につながる。これは、学びの結果として、好ましい姿が、キリスト教と仏教で違うということなのである。学びの結果の評価が、キリスト教者の遠藤、三浦、山本、海老沢と仏教者の釈とでは異なるため、ハビアンの学ぶ態度に関する評価も「要領のよすぎる

秀才」と「誠実な宗教者」という違いになるのではないだろうか。

ハビアンについて、結果として中軸がないからと言って、学ぶプロセスにおいて自らへの問いかけという行為がなかったわけではないと筆者は考えている。ハビアンは、人間性心理学の言葉でいえば、「体験に触れながら」学び続けたと考えてよいと思われる。宗教を信者として学ぶ場合は、まずはじめに、信仰を持つ必要がある。それを中軸として自らに問い続けることで、中軸はより確かなものになる。まずは信仰から入って、その後の学びに入るということができなかったハビアンならば、いくら学んでも信仰の中軸はできないのであろう。しかし、学ぶ態度が、浅薄であったとは思われぬし、学んで得た知識が浅薄であったとも思われぬ。

3 ハビアンの学ぶ態度とハビアンが学んだ内容

不干斎ハビアンの学びの態度と学んだ内容の問題をさらに考えてみたい。転向を繰り返す、ハビアンには中軸がない。しかし、学んだ知識は構造化されたものであろうし、学ぶ態度も真摯であったと筆者には感じられる。**自己に問いかけ続ける学びをすることで、中軸なき知識構造が作られたように感じられるのである。**

ハビアンには「妙貞問答」と「破堤宇子」の二冊の著書がある。前者は、キリシタンであった時代に、キリスト教の優位性を広めるために書かれたものであり、後者は、キリスト教を棄教した後、キリスト教を批判するために書かれたものである。

「妙貞問答」は、妙秀と幽貞という二人の尼僧が、対話をするという形式である。主に、仏教徒の妙秀が質問をして、それに対してキリスト教徒の幽貞が答えてゆくことで、仏教、儒教、神道、キリスト教のエッセンスをダイジェストで解説することになっている。一方「破堤宇子」は、まるで、「妙貞問答」のQ & AのQとAを逆にしたようなものなのである。そこで使われている材料は両著書でほとんど同じものであ

る。海老沢（1970）はこの「破堤宇子」について、「その論法は全く、『妙貞問答』を裏返したごとく、それにおいて批判したことをこれにおいては論拠として、それにおいて主張したことを批判するというありさまで、（略）ハビアンという、信仰的・内面的把握をなしえなかった人間の限界であるといえよう」と評している。「信仰的・内面的把握をなしえなかった人間の限界」という評価は、中軸を作りえなかったハビアンという人間と、中軸を作りえなかったハビアンの学びの態度に対する二つの批判と解釈してもよいだろう。

ところが、海老沢（1970）はハビアンの人間としての限界を指摘する一方で、破堤宇子に書かれてある内容に関しては「他のキリシタン書に比して一頭地を抜いており、確かに当時にキリシタン・パアレらの教理説明の不合理な点を把握し批判を加えているといえる」と評価している。また、妙貞問答に関しても「そこに現れた合理的・批判的精神は、その豊富な思想内容とともに（略）安土・桃山時代におけるもっとも注目すべき書であるということが出来る」と評価している。つまり、海老沢はハビアンの著書に対しては、高評価を与えているのである。そして、海老沢のみならず、ハビアンの著書に関する評価は、研究者間では高いのである。これはハビアンの持っている知識に対する評価が高いということである。つまり、ハビアンの知識は、信仰という中軸に基づくものではないが、構造化はされていたと考えてよいのではないだろうか。構造化されていたからこそ、確たる体系があるキリスト教の教えに対して、擁護と批判をする、つまり、キリスト教に関する自らのスタンスにコミットする、ことができたのではないだろうか。

ハビアンのこの二冊の書は、Q&A の方式である。妙貞問答には、二人の尼僧が出てきて、質問と解答を繰り返すのだが、書いたのはハビアンひとりなので、実際には、ハビアンが質問してハビアンが答えているのである。破堤宇子

も、ハビアンが一人で書いたものなので、つまり、ハビアンの疑問にハビアンが答えているのである。ハビアンは、自らに疑問を提示して、自らの疑問に解を与えるような学びをずっと続けてきたがゆえに、このような形式が、最も書きやすかったのではないだろうか。

ハビアンがこのようなスタイルで学びを深めていったのは、ハビアンの教団内でのポジションが影響していたという理由が一つ考えられる。実は、ハビアンはイエズス会が設立した日本の女子修道院で、教師をしていたのである。教師が教えるという職務を真摯に実行しようとすれば、**教材と対話をし、生徒と対話することが不可欠である**と筆者は断言できる。ある事柄を教えようとすれば、そこには必ず、多少不明瞭な事柄、どうにも整合性に欠けると思われるような事柄が含まれる。その部分を、不明瞭にしたままでも生徒に教えることはできるだろう。教えられた生徒の方も、その部分は深く考えず、なんとなく「そんなものか」程度の認識を持って、不明瞭なままわかった気になってしまう。しかし教師のこのような態度は、教えるという職務に真摯な態度とはいえない。不明瞭な部分をそのままにせず、多くの資料に当たり、自らの中ですでに構築されている知識構造と照らし合わせ、思考を巡らせることにより自答できるのである。そして、自問自答のプロセスそのものを生徒に体験させられれば、生徒の理解も進むのである。生徒の理解を促進させる要因は、説明のうまさなどの教授テクニックに類するようなことではない。教師自身がこのようにして学んでゆくことを、決しておろそかにしない態度にこそ、その要因があるといえる。“the way to do is to be”なのである。ハビアンは、修道女たちに講義をする際には、自ら学ぶことを決しておろそかにせず、妙貞問答に述べられているような疑問を自ら立てて、思考を巡らし自答を与えるという行為を繰り返していたのであろう。

また、ハビアンは女子修道院で教えるだけで

はなく、日本各地を駆け巡り、さまざまな階層の人と議論・論争を繰り広げてもある。西で並みいる仏僧たちを相手に、ただ一人で立ち向かったかと思えば、東で幕府公認の朱子学者相手に、堂々の論陣を張るという活躍ぶりである。ハビアン構造が確かなものになったのは、教師として、常に自ら問い続ける学びを続けたがゆえだろうが、もう一つの理由は、日本各地を駆け巡り、庶民、大名、宗教家、学者など、あらゆる階層の人とあらゆる議論・論争の第一線を経験したからであろう。そのような経験が自問自答をより深くし、知識構造をより確かなものにしていったはずである。ゆえに、海老沢をして「安土・桃山時代におけるもっとも注目すべき書」と評価される書を著すことができたのである。

釈(2009)は、ハビアンの学ぶ態度を「一回一回その宗教の体系をたどり体験を通してリアルに会得した言葉で語っている」と評し、学んだ内容について「数限りない対話と討論によってねりあげられた強さを感じる」と評している。釈のこの言葉を、人間性心理学の用語に翻訳すれば「体験に触れながら、知識を構造化した」となるであろう。

III 学び方と学びによって得られる知識 —古武道の形稽古を手掛かりとして—

1 形稽古の際の意識の持ち方

学ぶ態度と、学びによって得られる知識の構造について、古武道の形稽古を考察することも大きな手掛かりになるはずである。古武道では、形稽古(かたげいこ)を重視する。現代武道にも形はあるが、形稽古の意味は古武道のそれとは全く異なる。形競技がない現代武道においては、形稽古の意義は「実戦的動きの基本」とか「精神面の充実」として位置づけられることが多い。形競技のある現代武道では、まず、競技者として高得点を挙げるのが目的となりがちであり、競技者は、正確に美しく力強く形を

演ずることで、高得点を得ることを目的にしがちである。とすれば、形として決められた通りの動きを正確に動く稽古を数多くこなす必要がある。そこでは学習心理学でいうところの「練習の法則」がそのままあてはまるはずである。一方、古武道では練習の法則のような原理にのっとった形稽古をしているわけではない。気づいてみれば、結果として数多く形稽古をこなしていたということはあるかもしれない。しかし、古武道での形稽古とは数をこなすものではなく、1回1回、すべて、「いま・ここ」の意識を持ってなされるべきものなのである。

甲野(2002)は、自らの稽古を『『これを数やっていけば、ひとりでに上手になる』とか『余計なことを考えず、ひたすらこの基礎をやれ』ということが全くなくて、』と述べ、毎回毎回、自分で考えながらやる稽古の必要性を説いている。

また、剣術、居合術、柔術などの宗家であり、振武館黒田道場の館長である黒田鉄山(2000)は、「前後振り」を祖父に見てもらった時、祖父からひと言「太刀が遅れる」という指摘を受けたので、より速く太刀を振りおろしこれでいいと思ったところ、祖父から「駄目なものをいくら速くしてもダメだ」と言われた際の意識について述べている。“それ以後、今まで意識もなかった左右の手の返しに明確な違和感が実感されるようになった。確かに、右へ左へと太刀を返すというよりも廻している、こねているという感が終始つきまとうようになった”という経験を述べている。そして“素振りというものは、(略)仮想敵、据え物などが対象ではない。**自分自身が対象なのだ**”と結論付けている。この記述からわかることは、古武道の形稽古は、常にいま・ここでの自分の体の内部の感覚を確かめながら行うものであるということであり、つまり、常に**自分の体と対話を繰り返しながら行われるものである**ということである。したがって、**形稽古は、常に、1回1回が「いま・ここ」の意識を持って自分の体の内なる感覚と対**

話をしながら行われるべきものである。古武道の形稽古は、数多く形をこなして、形を体に覚えさせ、決められた動きをより正確に美しく力強く演じられるようになることを目指す形稽古とは、あるいは「精神面の充実」を目指す形稽古とは、本質的な意義が異なっているのである。

2 形稽古によって身に付く動き

そのような意識で稽古をして身に付く古武道の形とは、一体、どのようなものなのだろうか。このことについて、古流の沖繩空手の流れをくむ糸東流の宗家、摩文仁賢榮(2001)は、古来の沖繩空手の形の動きを「素人目からすれば、ふにゃふにゃとした、とらえどころのない居着かない動き」と述べている。また、黒田(2000)も「軽く、柔らかく、速く、静かで浮いている。しかも美しく、動きは消える。これが古伝の日本武術の世界である」と述べている。ここで述べられている形の動きは、競技スポーツとしての現代武道とは大きく異なった、古武道独自の動きである。競技スポーツとしての現代武道では、力強く(軽くなく静かでもなく浮かない)、スピード感あふれる(ふにゃふにゃしていない明確な)動きがよいはずである。この両者の違いの最も重要な点を一つあげると、古武道の動きは身体に中軸をつくらないということである。中軸がないから、「ふにゃふにゃととらえどころがない、軽く、静かで浮いた」動きになるのである。現代武道では、関節を中軸にして、関節という支点から先をてこのように使い、てこの原理で作用点にパワーとスピードが出るような動きをする。一方、古武道では軸を作らず、つまり、てこの支点を作らず、全身を動かすことを心掛ける。そのような動きを身に着けるために古武道の形稽古は行われるのである。

3 古武道における形稽古の学び方と学んだ内容の関係

形稽古では、全身の内部の動きを感じながら、

全身と調和していない部分を微調整しながら動くという意識が不可欠となる。そのように自らの身体の内部感覚と対話をしながら、部分と全身を調和させた動きを身に着けると、「ふにゃふにゃととらえどころがない、軽く、静かで浮いた」動きができるようになるのである。では、中軸を作らずふにゃふにゃと動けるようになることで、何を狙っているだろうか。

内田(2005)は、稽古を積んで自己内に構造を作り、それを内観して覚知する稽古法について言及した後、「すべての武術の形稽古というのは、この単独で存在する『構造』が未知のファクターや負荷(つまり相手からの加撃や妨害)が加わったことでいったん解離し、その新たなファクターを組み込んだ形で自己組織化し『構造』をバージョンアップする無窮のプロセスというふうに理解できるのではないか」と述べている。この内田の説に従うと、①形稽古では自己の内部の構造を意識することと、②構造に中軸があってはならないこと、以上の2点が大切であるということになる。中軸があると構造がいったん解離することも、自己再組織化も難しくなるであろう。このことについて内田(2005)は、「稽古のねらいは『不壊の構造』を維持することではなく、『未知なるファクター』を迎え入れたときに、瞬間的に『それを含んだ新しい構造』を再構築する『柔軟性』と『開放性』の感覚を研ぎ澄ますことにある」と述べている。感覚を研ぎ澄ます意識で学ぶことにより、再構築されることを前提とする現在の構造が作られるのである。

つまり、形稽古では、相手から攻撃を受けると、攻撃を受けた瞬間に、その攻撃を含んだ新たな構造を自己内に再構築できる体のシステムを作ることを目指しているのである。そのようなシステムを作ることで、ノールールの実戦に対応しようとしているのである。実戦とは、あらゆる状況におけるあらゆる相手からのあらゆる攻撃を想定せねばならない局面である。その局面においては、そのシステムを自己内に持つ

ことこそ、必勝の道だからである。黒田によれば“形は技そのもの、理論そのもの”なのである。

ここでの古武道の形稽古における、①学び方と②学んだ結果の問題は、まさに、ハビアンに関する考察で指摘したことと同じである。①については、常に自己の内部を感じ、身体と対話を繰り返しながら学ぶことが重要である。②については、中軸を作らず、しかし、構造を作ることが重要である。

IV 信頼の根拠—中軸なき構造—を作る

1 ハビアンと古武道の共通性

不干斎ハビアンと古武道の両者に共通することは、自らの言動に確信を持たねばならなかった点である。古武道では、あらゆる状況下のあらゆる相手からのあらゆる攻撃を想定している。ハビアンも、教団の代表として他宗の宗教家や学者と論争をして、あるいは、市井の人や大名などにもキリスト教を説いてきて、あるいは、キリスト教を学びたい女性に、教団内でキリスト教を教えてきた。つまり、あらゆる状況下のあらゆる相手からのあらゆる質問が、ハビアンに対してなされてきたのである。このように、あらゆる攻撃やあらゆる質問に身をさらされる立場に生きるものであれば、どのような攻撃や質問にも対応できる自己を形成しておきたいと考えるようになるであろう。その時に対応できるという確信の根拠が、すなわち自己内に身体や知識の中軸なき構造を作ることなのである。

実戦では、「試合開始」の合図もなく、突然戦闘状態に突入する。その時に、相手のいかなる攻撃にも瞬時に反応できなければならない。ところが、軸を支点として体を使う動きでは、初動に時間がかかりすぎて間に合わない。また、全身がバラバラに動いているのは、次の一瞬で相手を制するような効果的な反撃もできない。中軸を持たず、かつ全身が調和したふにゃふにゃ

と居着かない、軽い、浮いた動きこそが、そのような場にあっては効果的な動きなのである。

ハビアンは、キリスト教に対するいかなる質問でも討論でも、受けて立てる確信をもっていたはずである。確信の根拠は、自らの内部で構造化されている知識体系への信頼感である。知識が豊富なだけで、体系化がされていなければ、あらゆる立場の人のあらゆるレベルや種類の質問に答えられるものではないし、確信も持てないだろう。ハビアンは、キリスト教に対して、他宗とも比較しながら自問自答を繰り返すことによって、その体系を作ったのである。しかし、キリスト教への信仰という中軸を持っていなかったため、さまざまな宗教を想定した自問を立て自答を繰り返すうちに、仏教も儒教も神道も組み込まれたうえでの整合性を持つ新たな構造が構築されていったのであろう。しかし、その時、ハビアンはキリスト教の信者からは、すでに遠く離れていた自分に気づき棄教したのではないだろうか。

2 現実問題に対処するための中軸なき構造

さて、ここで、本稿の目的である、信頼の根拠について考察してみたい。日本国憲法、原子力発電所、TPP 加入、消費税率値上げ、等これらの問題に確信をもって判断を下すためには、当然、豊富な知識が必要である。「原発は危険だから廃止すべきである」という程度の判断でよいのならば、小学校4年生でも確信をもって下すことができるだろう。しかし、仮にも一国のエネルギー政策が、小学生並みの単純な視点からの判断でよいはずがない。安全性だけをとつても、さまざまな視点から検討するべきである。

どのくらいの放射線を浴びればどのような危険があるのか、広島、長崎、チェルノブイリなどで、過去にどの程度の放射線の被害が出ているのか。他の発電形態に比べて原発の危険性は高いのか。飛行機と自動車では、実は自動車の方がずっと危険性が高いように、もしかすると

火力発電の方が原発より危険であるとは言えないだろうか、等、様々な視点から検討する必要がある。また、安全性のみの視点から一国のエネルギー政策の判断を下すこともできない。経済性、環境問題、国策などの視点からも他の発電形態と比較したうえで、現代の日本にあってどういう発電形態をとることが最適なのかを判断すべきである。このように考えた場合、原発であれ、憲法改正であれ、TPPであれ、消費税率であれ、多くの視点からの検討が必須であり、そのためには構造化された豊富な知識が必要ということになる。現実の問題は、常に複雑系である。さまざまな要因が複雑に影響を及ぼしあった問題となって立ち現われてくる。そこには、**単純な正解など存在しない**といつてよい。常に**比較的ましな解のみが存在**している。そして、議会制民主主義という制度を採用している我が国にあっては、何が比較的ましな解なのかを判断するのは一人一人の国民である。単純な正解が存在しない複雑系の問題に対して、一人一人の国民が、自らが確信できる根拠をもって判断を下さなければならないのである。そのためには、一人一人の国民に、構造化された豊富な知識が必須であり、それがないと、確信を持つことなどできないであろう。その時の構造化された知識には、中軸がない方が望ましいであろう。

不干斎ハビアンも古武道も、限定的な問題ではなく、複雑系の問題に対処しようとして、中軸なき構造を持つに至ったのである。

例えば、空手の試合で、「試合開始」の合図がかかる前に、こっそり相手の背後に回って後頭部に正拳突きを仕掛けてくる人はいない。柔道の試合で、組み手争いの最中に、三日月蹴りを蹴ってくる人はいない。剣道の試合でつばぜり合いになったとき、相手の首を抱え込んで、大外刈りを仕掛けてくる人もいない。しかし、そのような反則攻撃を狙ってやれば、かなりの確率で決まるのではないだろうか。それが決まるのは、競技スポーツでは、ルール内での攻撃の

みに対応できるように技術体系が作られているからである。技術体系の基本は、関節を支点として軸を作り、作用点にスピードとパワーを与える動きである。ルール内での勝敗を競うのであれば、この動きが最も合理的であろう。しかし、古武道が想定する、あらゆる状況下におけるあらゆる攻撃には、中軸を作る動きでは対応できない事態が多く生じる。ハビアンも、仏教、儒教、神道などを学んで論争や修道女の教育に対応した。つまり、キリスト者として信仰を持って学び、その中で中軸を形成することがハビアンにはできなかったのだが、しかし、中軸があれば構造は変わりにくく、あらゆる質問には対応しくくなるのである。

中軸なき構造こそが、あらゆる状況におけるあらゆる攻撃を想定する古武道では有利なように、あらゆる宗教家やあらゆる立場の人からの論争や質問を受けて立つハビアンには有利であるように、様々な要因が複雑に関連しあった現代社会の複雑系の問題に、判断を下す際にも有利だと思われる。

キリスト教への深い信仰を持つ人ならば、自らの信仰という中軸に問いかけて、現代社会の複雑系の問題に、**絶対的な正解**を確信をもって出すことが可能であろう。しかし、その絶対的な解が現実実現可能かどうかは定かではない。一方、中軸なき知識構造を持つ人ならば、そのような問題に対して、自らの知識構造に問いかけて、**実現可能で比較的ましな解**を出すことが可能であろう。出した解を信頼してよい根拠は、どちらも自己内に存在する知識構造だが、構造に中軸があるかないかが大きな違いとなり、導き出された解も「絶対的」か「比較的まし」かという違いとなる。そして、議会制民主主義のわが国にあっては、国民の一人一人が比較的ましな解を出すための判断力を身に着ける必要がある。その解を信頼してよい根拠が、自己内に構築された中軸なき知識構造である。つまり、一人一人の国民が中軸なき知識構造を持つべきなのである。そのためには、学校教育の

果たす役割は、非常に重要である。

V 学校教育の役割—信頼の根拠を作る—

1 学校の授業に対する一つの提言

中軸なき知識構造を作るために、学校における授業の在り方について一つの提言をしてみたい。

不干斎ハビアンや古武道家は、自己内に構造を、当然のことながら、学びによって作ったのである。ハビアンや古武道家に共通する学びの態度の本質は、対話である。古武道においては、自らの身体感覚を内省し身体と対話を交わす形稽古によって構造が構築される。ハビアンにおいては、イエズス会の教師として生徒と対話をし、教材と対話をし、教団を代表してさまざまな階層の人と議論・討論という対話を繰り返すことで自己との対話を深めて、構造を構築した。現代の学校は、対話を重視した授業により、知識構造を作ることがその役割である。学校こそがその役割を担うべき最適の機関である。

「学校以外でも勉強はできるのに、なぜ学校に来ないといけないのですか」という質問を子どもから受けて、「学校では、勉強以外のことも学べるから」などと、見当はずれの答えを出す教師がいる。学校で、勉強以外のことも学べるのは確かであろう。しかし、学校が勉強をする場であることも確かである。この答えが見当はずれなのは、なぜ、学校で勉強をする必要があるのかについては、全く答えられていないからである。子どもは「なぜ、学校で勉強をする必要があるのか」の答えを求めているのである。勉強をさせる側の教師自身がそれに答えないのは不誠実といってよいだろう。「勉強しないといい高校や大学に入れなから」と答える方が、まだましである。少なくとも、子どもの疑問に向き合っている。しかし、「いい高校、大学」説は、なぜそれが「学校で」という疑問に対する説得力は弱い。塾で勉強した方がいい高校や大学に入れる場合も多くある。しかし、学校の授業に意味を感じていれば、子どもはそもそも

このような疑問を持たないはずであり、子どもからこのような質問が出た時点で、教師は半分負けているのである。

2 今泉博の授業実践

今泉(1994)に、縄文土器と弥生土器のどちらが新しいかをテーマにした授業実践がある。AとBの二つの土器の写真を見せて「A(縄文土器の写真)とB(弥生土器の写真)ではどちらが新しいのか」を、子どもたちに投げかけてみる。まず、多くの子どもが、「Aの方が装飾がすごいので新しい」と主張する。その意見に賛同する子どもも多い。しかし、そのうちに、使いやすさという機能面を見て「Bの方が新しい」と主張する子どもたちも現れる。そのような討論が進んでいって「粘土が、Bの方が薄い」と言い出す子が現れ、やがて「薄くても土器として使用可能ならば、高温で焼く技術があったBの方が新しい」という意見が出て、最後にはほとんどの子どもが、Bの方が新しいと確信するというのである。

テストの点数をあげることをのみを目的とするならば、このような授業は必要ない。教師がすべて説明すればよいであろう。両方の土器の写真を示し、両方の特徴、使用目的、作られた年代、時代の特徴、土器の名称などを、わかりやすい表にまとめて効率的に説明し、暗記する時間を10分程度与え、授業の終わりに10分程度を使って暗記できたかどうかをテストする。点数を競わせれば、暗記するモチベーションも高まるだろう。以上のようなことを45分かけてやれば、テストの点数を取るための授業を効率的にできる。しかし、一体それのどこが楽しいのだろうか。人より良い点が取れて優越感が満たされるという楽しさは一部の子どもにあるのかもしれないが、多くの子どもにとっては「なんで学校で勉強する必要があるか」という疑問がわいてくるに違いない。

「ただ教師の話の聞いているような授業では、わざわざ学校に出かけて、みんなで学ぶ意味は

なくなってしまう。授業は大勢の子どもが発言しだすことで活気づきます。(略)多様な意見が出されると対立も起こります。(略)断片的な体験や事実が、集団の討論と思考の積み重ねによって、つながってゆきます」(今泉, 1994)。ということなのである。そして、ここで述べられている、「多様な意見」「対立」「集団の討論と思考の積み重ね」こそが、自己内に中軸なき構造を作るのである。さまざまな子どもが同じクラスに存在するのが学校である。だから学校で、さまざまな意見が討論され検討ができる授業をやるのである。これこそが、学校の長所である。

この時、間違っただ意見は貴重である。一直線に正解にたどり着く授業は、効率はいいだろうが、それでは対話や内省が進みにくい。人は、間違ふことにより、なぜそれが間違いなのか、これが間違いであるのなら、ではどう考えればよいのかという、自己との対話が出現し内省が進む。ハピアンや古武道家が、対話をすることで構造を作ったように、知識に関しても、間違いによって対話が出現し、それを考えることにより構造が構築されるのである。今泉の実践で示された「装飾がすごいので縄文土器の方が新しい」という意見は間違っただいはいる。しかし、土器の装飾という点に注目すると、そのような結論になることもありうる。つまり、間違いは、別の視点から検討した結果である。間違ふからこそ、対話が深まり、新しい視点を取り入れた考えが組み込まれた次の新たな構造が構築されるのである。ある視点から検討して間違い、間違ふることによってより合理的な別の視点から検討し、新しい視点を取り入れた考えが組み込まれた次の新たな構造が構築されるのである。これこそが、本稿で問題としている、「中軸なき構造」ということになる。さまざまな視点から検討をすることで構造はバージョンアップする。確固たる中軸があれば、構造は変化しにくい。縄文土器と弥生土器の新しさを検討するとき、「装飾」という視点と「土器の機能」とい

う視点を検討した末に、「粘土の薄さ」の視点からの検討に至り、弥生土器が新しいという正解に到達した。つまり、変化しやすい構造だから、新しい考えに触れたときに構造をバージョンアップさせることが可能となる。いきなり、正解にいたる視点だけを示し正解を教えるような授業、つまり、「粘土の薄い弥生土器の時代は、高温で焼く技術があったということであり、つまり、縄文時代よりも新しい」と教えるような授業では、構造は安定したままで、変化は起こりにくい。しかし、それでは、いまの構造では対応できない情報に接した時に、構造を変えて対応するという経験を与えていないということになる。

3 まとめ

テストで高点数を取り受験を突破することを目指せば、効率が最優先される。受験に必要な知識は膨大であり、それをすべて注入するためには、時間がいくらあっても足りないからである。時間的効率最優先の授業では、間違いはしない方がいい、あるいは、間違いはできればしない方がいいとの間違い観に教師は支配されがちとなる。しかし、問題をさまざまな視点から検討し、学びを深め、自己内により高次の構造を構築してゆくためには、間違いはできればしない方がいいのではない。間違いはできればした方がいいのである。さまざまな子どもが集う学校だからこそ、さまざまな間違いが出現しやすく、さまざまな視点からの検討ができる。

間違いはできればしない方がよいとの考えのもとで、一直線に答えに到達する方法を教え、問題が解けるようになることを目標とする授業を受ければ、唯一の正解を出すことを求められるテストでは、高得点を獲得できるようにはなるだろう。しかし、それでは、唯一の正解などどこにも存在しない複雑系の現代社会の問題に、確信をもって比較的ましな解を出すことはできない。確信をもって比較的ましな解を出すためには、間違いを繰り返しながらの対話によ

って自問自答を深める授業を経験して、中軸なき知識の構造を自己内に作る必要がある。

そのような知識構造を作ることで、様々な情報に触れたときにも、確信をもった判断ができるようになるになるのである。つまり、**信頼の根拠となるものは、学校教育によって自己内に作られた中軸なき知識の構造である。**したがって、学校は、さまざま視点からの対話を重視して、子どもが間違い、内省が深まり、中軸なき構造を作ることに貢献できるような授業をするべきである。そのような授業をするという学校のミッションは、別に特別なことではない。それこそが、学問の本質に触れるような授業であり、学校こそ、学問の本質に触れる場所となるべきなのである。学問の本質に触れることは楽しいはずである。つまり、学校では、毎日楽しい授業をやるべきなのである。毎日の授業が楽しければ、子どもに「なぜ学校で勉強するのか」という疑問は湧いてこないだろう。当然であるが、「いい高校、いい大学に入れるようにする」授業が、学校のミッションではないはずである。そのような授業は、ある意味実用的かもしれないが学問の本質とは関係ない。学問の本質に関係ない授業は、根本のところでは楽しくはならない。

さて、信頼の根拠を作ることにに関する結論である。それは、学校において、学問の本質に触れ**知的興味を満たされる楽しい授業を行う**ということである。ここまでの複雑な考察に比較して、なんとも、当たり前すぎるシンプルな結論だが、この結論を筆者は確信している。「真実は当たり前でシンプルなものである。」このテーマを真とすることが、筆者の現在の知識構造からの判断だからである。しかし中軸なき構造からの判断なので、変化する可能性が含まれた確信でもある。

文 献

- 海老沢有道 (1964) : 破堤宇子解説 275-27 海老沢有道 道訳「南蛮寺興廃記・邪教大意・妙貞問答・破堤宇子」平凡社。
- 海老沢有道 (1970) : 解説 破堤宇子 日本思想体系 25 637-638 岩波書店。
- 今泉博 (1994) : どの子も発言したくなる授業 学陽書房。
- 甲野善紀 (1995) : 武術の新・人間学 温故知新の身体論 PHP 研究所。
- 黒田鉄山 (2000) : 気剣体一致の「改」 BAB ジャパン社。
- 摩文仁賢榮 (2001) : 武道空手への招待 三交社。
- 釈徹宗 (2009) : 不干斎ハビアン 神も仏も捨てた宗教者 新潮社。
- 内田樹 (2005) : 智に働けば蔵が建つ 文芸春秋社。
- 山本七平 (1989) : 日本人とは何か (下巻) PHP 研究所。